

トップマネジメントセミナー 実施報告書

【演題】ダイバーシティの本質にせまる

—ジェンダー、人種、企業文化など様々な観点から—

【講師】マリ クリスティーヌ氏

異文化コミュニケーター／元国連ハビタット親善大使

【日時】平成 29 年 2 月 22 日（水） 16：00～17：40

【場所】岐阜薬科大学本部 第二講義室

【参加者数】51 人（うちトップクラス 14 人。女性研究者 14 人）

イタリア系アメリカ人と日本人のご両親のもと、子どもの頃から世界各国のまさに多様な文化の中で生活してきた、異文化コミュニケーターのマリ クリスティーヌ氏をお招きして、ダイバーシティの本質とは何かをお示しいただく講演会となった。

講師は、大学生の頃にスカウトされて芸能活動を始めた。「世界中をとびまわって仕事をしながらいろんな国の言葉を話せるようになって、

いろいろな国のいろいろな方々、いろいろな文化と出会うこと」という夢を持っていたが、気が付いたらテレビの仕事を通じてこのような仕事ができているという。

異文化、すなわち国籍だけではなく自分とは異なる多様な環境や文化を持つ人々、普段の自分と違うものとどう対応していくかが重要であると述べられた。

講師が代表を務める「アジアの女性と子どもネットワーク」や、協会副会長である「日本ハビタット協会」の活動の一部を紹介してくださった。おもに発展途上国で食事提供プロジェクトや学校建設など様々な活動をされているなかで、貧困だけではなく、女性問題にも関わってくる問題があり、具体的にはトイレ問題や教育問題である。ただし、相手の文化を尊重して、一方的な押し付けにならないよう進めなければいけないという注意点はあ

2015 年に国連において採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」の目標 5「ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る」を達成するため、日本には特に頑張ってほしいと力を込められた。つまり、発展途上国に対して、先進国である日本が大きな模範になれることであるからである。日本の様子を見てアジアの国々は真似をするため、日本がアジアの良い模範にならないといけ

ダイバーシティという言葉を使うとき、“多様な”とか、“人と人が仲良くすればいい”とかいうだけの問題と捉えがちであるが、すべてのものを受け入れられるかどう



かという問題でもある。重要なことは、寛大でいること。「相容れなくても尊重する」という態度が本当のダイバーシティであると繰り返し話された。

また、世界各国で使用されている製品を扱う企業においても、日本の常識だけでは対応できない事象が多く起こる。そこでは、相手に対し「同意はできないが受け入れる。しかし自分は違う意見である。」ということをはっきり示すことが必要である、と話された。それに加えて、多様な文化の中においてお互いを理解し合うためには、どれだけはっきりと、明確に、きちっとした形で物事を伝えられるかということが大変重要である。

このように共通認識のないもの同士がお互いうまくやっていけるよう、現在の問題をのり越えないと、つぎの段階、すなわち新しい発想や物事の考え方にはいけないということを力説された。

最後に、手を組んで左右どちらの手の親指が上にくるか、次に逆の手が上になるよう組んだ場合に違和を感じるかどうか、講師の声掛けにより参加者全員が試してみた。手を逆にした時に違和感のある方がほとんどであり、「だめですね」とのこと。違和を感じるのは柔軟性がないことを意味しているそうである。脳はいつもと違うことに違和を感じるものであるが、柔軟性を持ってあらゆることを受け入れられる人間であってほしい、別な角度で物事を見ることは大切なことである、と話された。

演題にあるように、ジェンダー、人種、企業文化など様々な観点からダイバーシティの本質にせまる話をしていただけた。多様な文化の中で生まれ育ち、活動していきなかで、講師が実体験として得られたダイバーシティの捉え方を聞くことができ、多角的に物事に対応できるように、一人一人が本当の意味でのダイバーシティを考える良いきっかけになったと思われる。ダイバーシティの原点を見直す有意義な機会になった。

